

錢鑑貨寫 畫 通油町 鶴喜板



通貨、金融史料

分類	X
整理番号	X 13 53
受入番号	15658
名称	錢鑑貨字更
備考	X 8 (123)



日本銀行
貨幣標本室

OPCARD 201



曲亭稗史

飯臺曲亭馬琴先醒姓瀧氏名辭字頊吉性好藉戲
 謔之言每作稗史以警悟當世是以雖兇園冊子亦
 有深意之存焉直可謂滑稽之雄也先生嘗言趙再
 白詩云名士本來如画餅古人原不好真龍先生之
 於小說也皆根于此予每歲請于先生而離刊其所
 著凡賜顧君子認印號為記冀不至悞

江戶膏坊翠橋仙鶴堂老舖小林喜備謹白

寬政庚申靈晨發行

全金

新鐫稗史錢鑒貨寫畫

月痕磨出テ

此生前

非是推ス破

驅市廓

情見真如

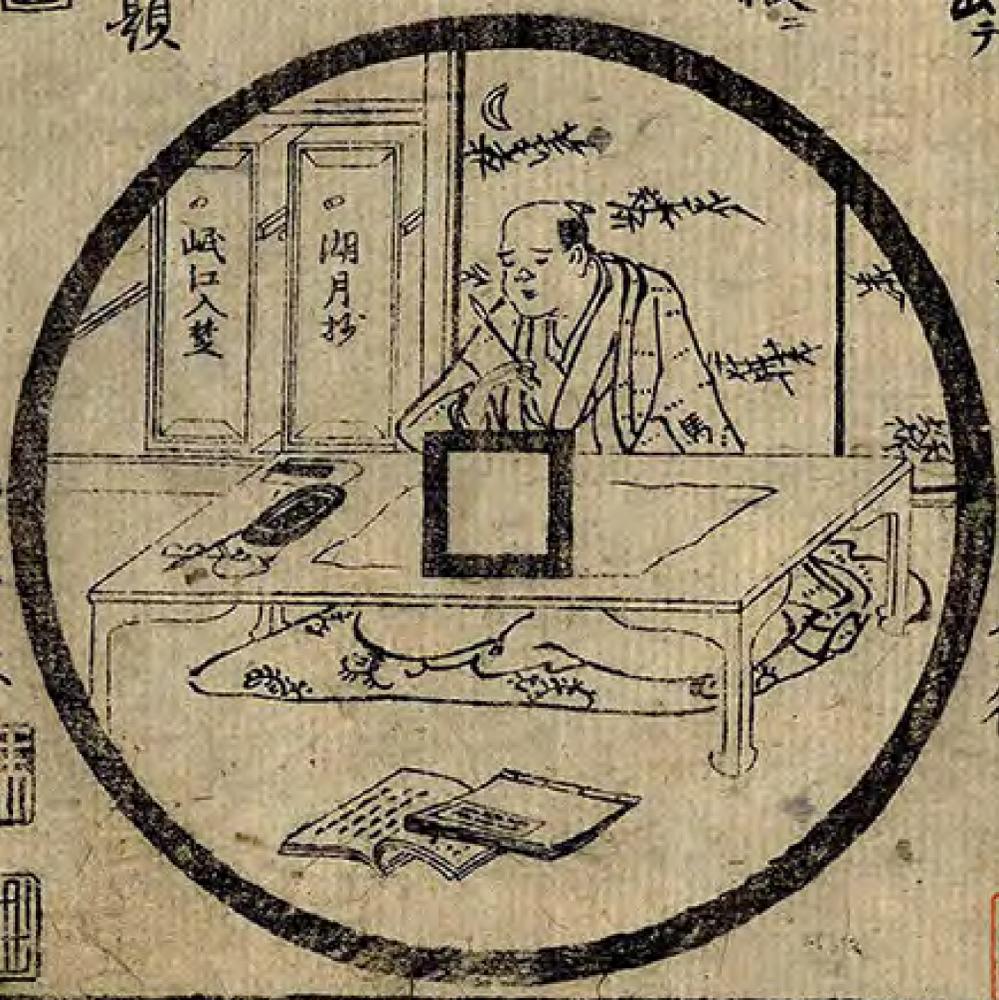
深貶思

人間推弄

隻神錢

京山陳人顯

昌 四



馬琴作

馬琴

馬琴

全金



大欲錢

大くせふをまつりて人かすまの
おとら五文のそま七文の七のろ
をきてこころにゆい千のち
あふれてくさのいん千のち
おけのちちんをあらうて
ねたもそれハ一まの札を
くつて百文のとまをそんと
まるとりもあまをぬすなり
ありてこれをまへくせふなり
ありてくさのいんをまへ
せぬくつて人をまへ
さいつちをまへ
ろちんまのいのでり
くまのちをまへ
ねをまのちけまへ
くまのちをまへ
あひてまへ
なまへ
ろくまのちのち
ろくまのちのち



引ねらふちやくいんちめ
のめしをいんちやくち
あまのちやくちやくち
にまのちやくちやくち
まのちやくちやくち
まのちやくちやくち

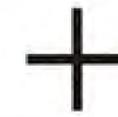
あまのちやくちやくち
まのちやくちやくち
まのちやくちやくち
まのちやくちやくち
まのちやくちやくち
まのちやくちやくち

鍋錢

あまのちやくちやくち
まのちやくちやくち
まのちやくちやくち
まのちやくちやくち
まのちやくちやくち
まのちやくちやくち



あまのちやくちやくち
まのちやくちやくち
まのちやくちやくち
まのちやくちやくち
まのちやくちやくち
まのちやくちやくち



佛法僧室

いづれにうつりてふとあり
ひらけりてあひを
つらききききききき
ふふふふの押登
われははははははは
いづれにうつりてふとあり
ひらけりてあひを
つらききききききき
ふふふふの押登
われははははははは

丈六銅佛建立

あき入るるるるる
あき入るるるるる
あき入るるるるる
あき入るるるるる
あき入るるるるる
あき入るるるるる
あき入るるるるる
あき入るるるるる
あき入るるるるる
あき入るるるるる



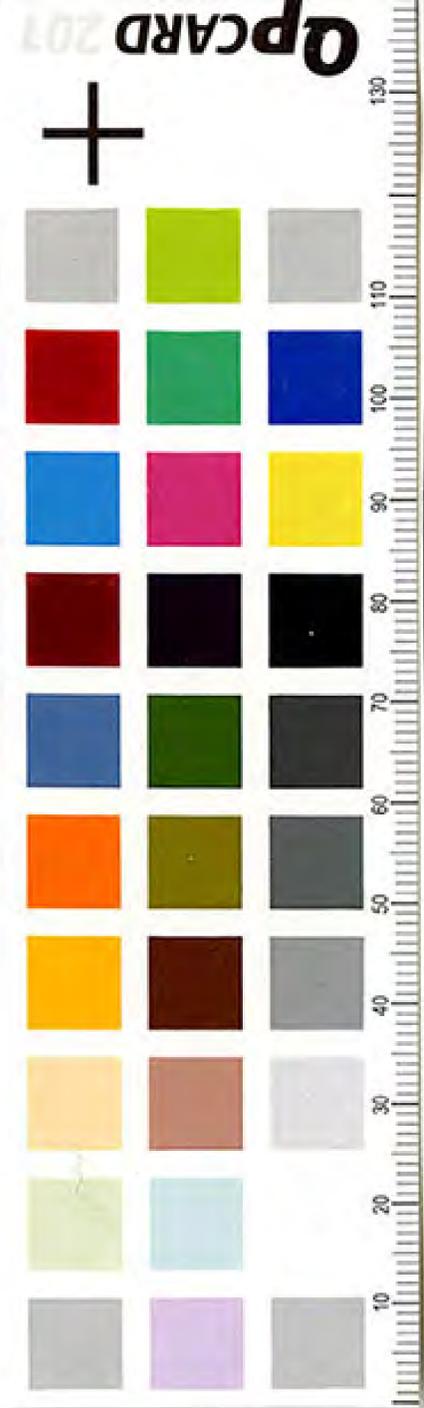
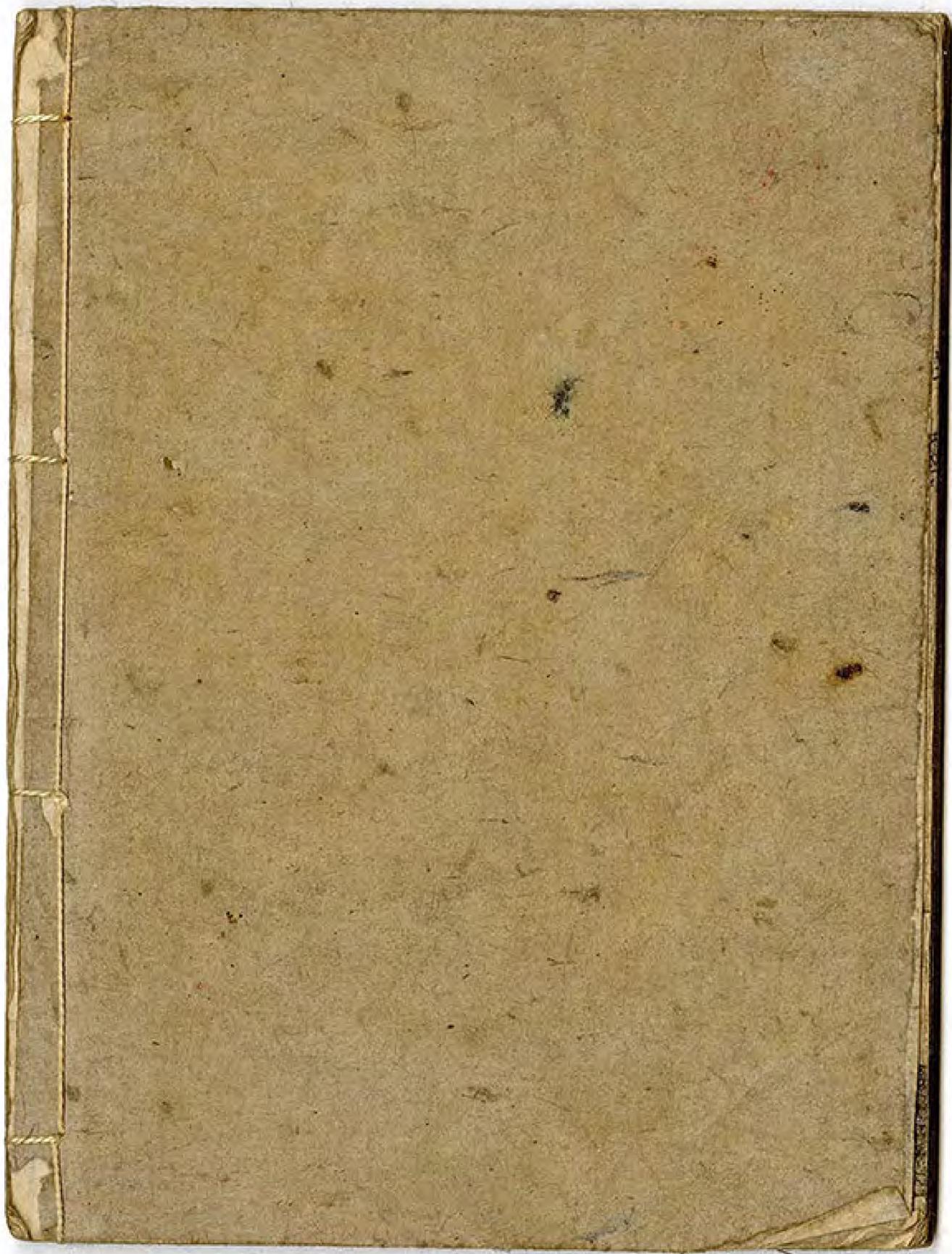
いづれにうつりてふとあり
ひらけりてあひを
つらききききききき
ふふふふの押登
われははははははは

谷麻局合宝

いづれにうつりてふとあり
ひらけりてあひを
つらききききききき
ふふふふの押登
われははははははは
いづれにうつりてふとあり
ひらけりてあひを
つらききききききき
ふふふふの押登
われははははははは



いづれにうつりてふとあり
ひらけりてあひを
つらききききききき
ふふふふの押登
われははははははは



展示した『銭鑑貨写画』の場面

内容と主なセリフ

〇**酔楽通宝**
酔楽通宝（よいらくつうほう）は、俗に言う**後引き銭**である。形は角が立って、裏に**太平楽**の三字がある。

〇**大意**
わずかにこの銭を手に触れば、目まい、立ちくらみが起こり、家の内は回り灯籠のように見え、ひどい時には一足も歩けなくなる。口から小間物を出し（嘔吐し）ても、犬よりほかに買い手もなく、いくら稼いでも**宵越しの銭**を持たない。

しかし、持ち手の心によって少しずつ貯えておき、時々出して適度に楽しめば、長命の幸いがある、とても**めでたい宝**である。



この男はあつたら（惜しいこと）に**銭**をみんな小間物にして（吐いて）しまった。

酒も色々飲んでみたが、池田の（すやま）ほど良い酒はあるめえ。まず第一に火がいらす色が白く、口あたりが良くて、いつ迄おいても悪くならぬことが妙だ。それだからこう酔ったのだが、どうしたのだ、中腹（ちゅうはら・怒る）じゃあねえが、やろうの法螺貝（ホラ・テマ）だと知ってな、ぶうくを言わせちゃあ、大峰山上の先達より音がするのだから、ゴウくくく。

酔っ払いに注目！
倒れた酔っ払いを人々が困り顔で見えています。当時、嘔吐することを「小間物店を出す」と表現していました。

《大意》

○読書調宝

読書調宝（よみかきちようほうせん）は、その値一字千金である。一年中怠りなくこの**銭**を持ち通せば、**筆一本・紙一枚で百里千里の先々まで通用する身の宝である。**

昔の師匠は弟子を選んで道理を教えたものだが、今の師匠は謝金を取って技能を教える。そのため、師匠のおかげで読み書きや諸芸が身につく弟子と、弟子のおかげで飯を食う師匠という関係になる。

お互いが利益を得ているようだが、子供の技能や諸芸が仕上がるには時間がかかるので、その面倒を見る師匠の大変さは、単純に勘定通りにはいかない。

ただ、師匠の方も、生活のために教えて稼いでいる弱みもあり、何と云っても謝金を出している子供たちの立場が強いものだ。



この場面では、子供たちは線香一本が燃えつきるまで、おしゃべりを我慢することになっているため、子供の書入れ（セリフ）は書いていない。

皆、精出しまし
ようぞ。とかく
人は読み書きが
第一じゃ。もろ
こしの人は、寝
たうちも読み書
きの事を忘れぬ
ゆえ、かの唐人
の寝言にも、読
み書き算用とら
やア〜と言う
たものじゃ。